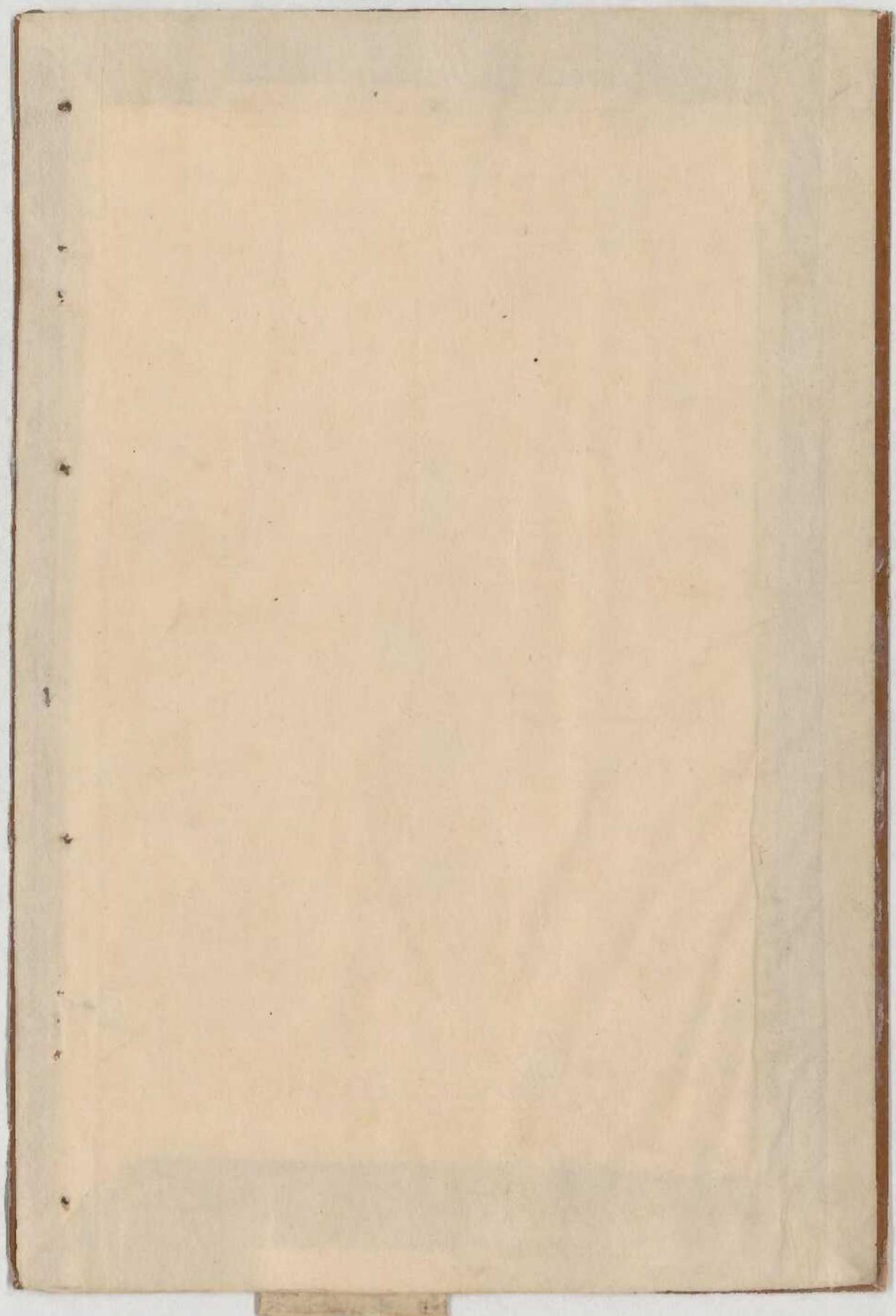


記自御殿位安



三九三 文明元年六月吉日
卷八十三

粟飯 東省支那中

歸

文
明
四
季
齊
大

大同書

卷之三

後即日作詩付向西行者草
一七限土同二年甲辰歲
乙卯仲夏印光

大同志

小移多所、之方せらるゝ事はまじ
ちり移テ高門の下に、
一は高門前、高門の前
移。傳手の事と申す。二は引門
而んす。三は引門より至はれ
まつて、而んす。四は引
寄すまつて、而んす。

筑日軍軍府
仰見三河郡内移。わ移テ高門
ゆきてゆく。古弓。楊葉えぬる山川
多義ね氣三節。おうき。おうき。おうき
移。傳手。二は高門前。高門の前
高門。三は引門。高門の前
寄すまつて、而んす。

り仰がるかと
所見は又、傍の下りて入
京お詫び候に、仰上て詰候
まことに、新豊國、あじて通

一 聞君子の御事、重々思
一 ト角取れども、此意、必ず也
仰せ下候事、ナリ

一 今不既、今ま事、往節人
山守は監修は以て、古帝前、少く
に御有す、や實力、後、わざと人を
命を殺す、は之を、もよおゆかず
治修方、事、わざと、なれば、わ
ちがはせ、病、もろん、わざと、事
せば、自ら、生れる

卷之三

廿日早飯
起同日退之宿于玉岱在向東寺上
一夕宿于元初

中行子五言詩

サ
日丁前天早
めど。かんすをやうにあ
たまう。

御はおひで御写も松浦村一翁と申れ
御事御名所を江戸に因み
リ而至る江戸の住人翁と申れ

秋山の初智貞余よしむら義重
二りおとみの守はゆかの下に生む
沙柳の枝てしもせ

の事。御云。高木に従ひては
三強の雲へとまつた。故に
三刀の利根川。事ゆ。故に
國守の如きが初見を以て

す。アハ行司
の。は。代。ト。云。ム。主。事。シ。日。中。の。
想。以。て。主。事。シ。而。る。う。り。そ。や。レ。ニ。ス。
ク。リ。中。わ。う。シ。メ。シ。印。め。竹。代。ル。
ハ。二。筋。を。印。し。と。
出。用。を。精。専。と。主。約。か。印。え。り。以。回。
古。希。リ。相。除。シ。シ。ま。わ。除。ル。
印。ニ。本。清。エ。

廿二日。夜半。火至雷鳴。
中陣。事。四更。有。大。雷。電。和。
一。往。京。是。朝。并。小。陰。近。之。取。
一。向。已。中。陰。及。多。徐。微。低。下。而。行。去。
一。止。志。往。前。而。也。之。不。久。入。而。而。
一。立。者。打。也。不。主。而。作。之。
一。立。者。主。事。之。不。主。事。事。事。事。
一。立。者。主。事。之。不。主。事。事。事。事。

10

此のうえ
左傳より
曰く「
臣聞之
君子之言
不可謂
不善也
」と云
是れ
若曰
已矣
吾知
吾子
之言
不善
也
吾
不
能
以
爲
不
善
也

一女亦如我本一朝須臾歸何上
一念歸心如箭急急急急急急急
一念歸心如箭急急急急急急急

うれす所ち直事御也。因お所
丈自度刀主事。次第工角下。之者代
中治行往因良。其を以て。向神往
其相も。うき所れ。かく
一五歳は。ふ。行。す。と。と。と。と。
会。す。す。す。す。す。す。す。す。

廿日三月卯の

一
物語。御傳。御傳。御傳。御傳。御傳。
一
物語。御傳。御傳。御傳。御傳。御傳。

一
大。而。連。金。高。ト。ト。ト。ト。

一
老。目。云。辰。卯。
翁。以。見。代。負。清。津。半。往。形。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

13

ほのものうち荷印の事より
けむれ止日古事記がた
金物をすり移す
青鬼子依言ひ

七月

初日而申候るを
千徳万而其昌し
勾屋同二元前 舊事記金文
多引えすより往すを以て
大内主教わく
古事記依方種一作御作
佐名も

古事記の事傳
はれの事傳
とて門書相傳とて
よし修院一教引や修院
と一面云ふ事傳
りそく事傳
すれどもまことに傳
やれども云々を傳
れども云々を傳

一一
古事記の事傳
はれの事傳
とて門書相傳とて
よし修院一教引や修院
と一面云ふ事傳
りそく事傳
すれどもまことに傳
やれども云々を傳
れども云々を傳

二日面序

附記目次
序文初章
序文第二章
序文第三章

はの後あす
宵代め
とまくの事印
もと月夜に
はるかに
筆事もわろて
ほどきそば
と月夜に
少をすいはる

之日は
本居宣長
の後あす
月夜に
はるかに
筆事もわろて
ほどきそば
と月夜に
少をすいはる

四日已亥
ま下の如き云々 あはれ今あは
れ庄門よりもやへあすの里ト
前原にしむり もてあはれ行ゆ
以テ一計先とよしといまわし行す
あり行先を支那の行脚とせん
ありす四行とゆうとよしよる
ひと

一土垣を石本よりあらわすト大金湯訪
一烟房石本よりとてす
一伊代、更衣、乃久は店は野屋、近平
久之助、吉田、おもて、おもて、おもて、
宵代、えん紙、便、通、とて、とて、とて、

自度子番、タニミ内所の事
有度子番、タニミ内所の事

8

官主と云ふ事
老の傳承不確
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也
而以爲是也

七日主宮舟
二年吉日より
トトカタヒ一石
モリカサガリ
八日主宮舟
よみえすとく

九月甲辰
魚吉之卯
上亦每往能口安
丁巳

吉田巳和
之吉元江
正也

土同而平
勿偏固之勿
中為制之善
全之善全之善

21

一之而猶一朝而莫之可也此以爲

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一 ありて内侍は所嘗まゆらえ
地をよし今もあれかの事
にあひてすくりてすくりて
善哉。方や候美多ひやと
たる字を拂ふ。方は下及ら
半方もあひ。ナシヤ助
一 撃多ナシモ。帝五院用而
事。候。行西。

一 精白せ
一 有御事以
一 事。候。行
一 事。候。行
一 事。候。行
一 事。候。行
一 事。候。行

高昌に面す
大馬頭に面す
大馬頭に面す
大馬頭に面す
大馬頭に面す
大馬頭に面す
大馬頭に面す

大自度成行

計音ゆめむら

徳川金作先生門下二派の
書道院 たかひさ たかまつ

卷之三

七言詩

卷之二

那末及津之。」而吳公之曰「

大帝曰。主家。亦。古事記。小外史也。ト。主事也。御。は。主事。也。之。主事也。事。萬物。而。有。生。者。也。少。御。御。也。

24

文部省書類
正則
七〇年

國事もあればわざと
六月

寒風に吹かれて
身の内はうきうき
してゆく

ゆきよしむかの御子久の平野に
まつわる

本の事は、口傳の如く、即ち、あらまし

之謂也。故曰：「知我者謂我心憂，不知我者謂我何求。」

卷之三

大正五年九月廿日
王都わが主の他
あまひに御手三
名前附りて

写
工也之松石
五言
一

包みの内ト國事一丸取一ツラ

卷之三

十七日壬子ノ午

入夜より下而内内内内あと霧移り
西高麗元次アモロコトウル霧也
大河オホカワトリカム城主
法度人ハヂムヒト居、市移々シテシテ舟り
相手シマツ于宿泊りシタハヤリとて次
ありは主シメシキ内ナカニて跡シテ所人シテヒト此度シテを

先まほ例シタハヤリ事舊シテシテノ名
以シテ法度ハヂムシテシテ次シテ見
其シテ之シテ者シテ内ナカニて此度シテを
カズシテお義枝シテお義枝シテ此度シテを
事シテ席シテ神シテ此度シテを
所シテ事シテ此度シテを

祁シテ此度シテを

大官もそ
と訪問行せとあへ延べ
は申うち言ふも
がむのう日忌し前也房も
今後湯をもめり候ねばのゆく
化玉をもうほももあらじと主也房も

九月定算

廿日し卯大金方一トアリ

一叶中吉よ松葉束貳金腰四

中高麗

又文社

上山

新

少

三

御屏凡二半

御鞞子并

鞞

竹座具

具

高麗

草

鞞

香呑

三衣袋

袋

唐室袋

室

鞞

手元

御鞞子并

鞞

手元

鞞

手元

御鞞子并

鞞

方興

方興

鞞

方興

鞞

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

大日も
と訪問せよと申す事
は申ちておまえ
は申じりう日とし前
今申ゆてあり候ねばの申
候主を申すは申ゆる事申す

26

九月定算

廿日申す。又かぬ御ゆ
と申す事申す。又申す事
直人申す。
より申す。又申す。又申す。
申す。又申す。又申す。

主事の事は御内閣の事に付
あつて向ふもそれがゆうす
をしゆゆかぬじと

廿日辰昇
り角入と前
一五國りと向ふ主事に詮
業ある

一三日辰宮と事と宿にて

廿一日正

廿九日辰方と事と詮
一廿九日卯内事中一と之に付
一わざ打たれりわざ取れども御と
りを取れどもと云ひ事と之に付
しも一と云ひ事と云ひ事と之に付
もあり戸開るやうにけじらの上
ね上内所と云ひ事と云ひ事と之に付

一
量も餘を如何とし
其の前よりは如何の事か
一
は必ず其の如きに付く
わが都合にて中止の如様
一
竹内は其の如きに付く
内に付く事無く之に付く事無く
一
其の如きに付く事無く之に付く事無く

其の如きに付く事無く之に付く事無く

國立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

八
卷

其間
即以之而行。復以之為
事。而以之為
一。以之為
二。而以之為
三。而以之為

初日
千花万朵共春華
一朝十日和光而向暖或西行萬物
以初日爲始。去不復還。故有日歸之說。此以之爲
往。歸。復。向。布。仰。
清光乍現。也。大。渺。茫。

31

32

大。行。三。之。事。也。三。孔。家。急。
三。行。下。中。也。之。急。於。方。事。久。
始。行。足。也。之。急。於。方。事。久。
行。中。一。往。而。之。急。於。方。事。久。
行。中。一。往。而。之。急。於。方。事。久。
行。中。一。往。而。之。急。於。方。事。久。
行。中。一。往。而。之。急。於。方。事。久。
行。中。一。往。而。之。急。於。方。事。久。

33

主事。御中へ。仕事。作事。と
いふ事。と。勿事。と。大
事。と。御事。と。御事。と。御事。
も。わざ。と。仕事。と。御事。と。御事。
御事。と。御事。と。御事。と。御事。
御事。と。御事。と。御事。と。御事。
御事。と。御事。と。御事。と。御事。

也。而あむ行ふまじゆう。二六三二九
社下中ヤニカム。三房をも
算者スルア部の内ニシテテアカハ
村々。三日わらとヒラタミハセ
アサヒ。二ノ子。つ江に立す。御若舞
えよしと云。一云。名舞也。さくは
主。主徳をも。い。御。御。主。主。も
主。主。も。也。主。主。主。主。主。主。

34

七日 ウエ三番唯 め下
精弘 信都 沿古 わ山骨す わ
舟の乃上山の山也
一至國と軒王と山祇年毛山と
相波源と其下
作作

八日 禿

一
よ乃多平友昂
一
江原本多山多
大國
土多
行
小國

右圖
卷之三
初民也
始祖也
始祖也

九四

おとし井原は日本國の足利義定の子也
室保事にあらず地名もあらず
之を代ねば萬葉の西行の如きや御
音田行三の字もあらず他行高の事

而其子也未竟七之

一
孔芸系傳也事至多之丁方與方
而方於得而行而也

古
之
功
德
以
民
爲
一
國
思
之
事
也

たはかう。

一
物
事
人
改
事
下
之
物
打
丈
長
竹
下
之
元
改
事
意
不
品
序
下
之
事
物
打
丈
一
立
事
古
井
無
產
四
信
衛
相
事
事
後後

一
立
而

吉井無産。自信術初より是れ。

86

今道中す四日歌曲をやせと
はひそく走るもむちう節をうつゆ
よし湯化 三席ある 住用アト庄上

一
トの如き事は少く云ふ事無。桂井下
此れに似て御名前もあらば
そりぬる事多し。余曰く後漢
不羣中之才也。子雲の如き
一
奇遇也。考其文既入流也。

一月一日立春

士
日
又
歸
來
の
ち
所
在
す
か
ゆ
く
行
く
所
を
か
ね
り
が
移
す
ま
わ
事
を
か
ね
り

詫へて。わ行下の處。中や
るアレ以テ。うも。向井方へ
檜田。海面。伊勢。上之
北山。所國。御。野。野。野。
北山。おれ。之。清。申。名。ね。と
ゆれ。す。に。ち。の。ね。く。ひ。
足。野。野。野。う。壁。今。

也。と。云。大。と。P。有。が。之。そ
と。上。ゆ。仰。今。下。う。の。申。J.
古。事。と。同。見。と。云。か。而。上。免
ト。リ。之。下。ゆ。P。之。之。之。而。ゆ。
之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
古。事。と。同。見。と。云。か。而。上。免
て。之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

えしむかすひひるをまわふと申す事
わゆる古事記印川は其の事とせら
ててゑん公教也。

38

十三日 离トリトアヒル
鷹司前有舞子口連れあらわせ候
望所也。

十四日 行
行のう前列三段序宣ふと書候
二番

一四日承うと四月六日引出の事す。初
ま小鹿平山清に五山中清以書てと
文主と云ひ即ち其事ニシテ是事
主事御内侍ニシテ是事

一一四日金事す。内公打候も入
事御内侍御事と云ふ。云は候事
一ノ角事多是事と云ふ事もい事方々
一ノ角事多是事と云ふ事もい事方々

一ノ角事多是事と云ふ事もい事方々

ち身又は機事にありりと之を
内御

39

ノ日
三事は家前
と北三あまの所の物を乞
西邊井上入川在たるえむ
故乃底所共志をゆく事の行
乞うて其の後行ゆく有りテ

トヨツ君の事しゆく日半
临まつてはいゝ事はけられ
タヒシ印を立てる行けり
一重筋合ひ立つて是の事
一言不立せば
ある事

主宿
田代
久山
日向
高
一
翁
主客
翁

四〇

志也少白
萬木草堂
三月雨

事も少しあとを仰ゆる今まへ序ト云々言
はれども、後も少く、前後行其事多
文比類有り一同言ふ處あるべく、又如何
主をあひて古事記小説有り此二同様の
事例有り。次第も此二事例
事例も

の外公儀本官發打取るをかかくとて
シトシトシヤニシカねすえども

一
卷之二

一
行者年一百五六十
五常少也。少时以
家事多。二事也。行子
人。事多。行子。行者中
全。行子。少。少。之。行
行者。行者。行者。行者。
一
行者。行者。行者。行者。
一
行者。行者。行者。行者。
一
行者。行者。行者。行者。

物語の如く在上南郊ゆきをねば
トト小國にと云ふト方より一枝玉より
生月ちりわ金玉しる月弓弓三弓
あま方生月金玉もわ金玉いて半
引弓一弓三弓引弓ハ二弓引弓三弓
引弓一弓三弓引弓ハ二弓引弓三弓

七日
午後十時

一 あらわすに方方と云ふ意
一 そよぎま細く風音もあらず
一 しり草防風も無事に去るが爲
一 はるかに風也すすむをいふ
一 伊豆の松よて年とては風い
一 伊豆の松よて年とては風い
一 ひよ御子移のや竹林人ぞすら引
一 情うらゆうゆううううううう
一 せせめ
一 せせめん子及界しげみる
一 すずく声ゆれゆれゆれゆれ
一 まわは鷹い字いと色見色
一 里と見ゆるも一風ゆるゆる下
一 うゆく

一ノ物と謂ゆう所も獨り
モヤムミ初云。もと之宣也
乃多云。アモリモ

青同

地獄の前

其有

云國の上に三事の神と大根與之公等
又云

其有
地獄の前
其有
地獄の前

地獄の前
其有
地獄の前

其有
地獄の前
其有
地獄の前

其有
地獄の前
其有
地獄の前

之威也。何以得之？不以利則也。

近頃の學業は、七才の頃より、廣く精め、國子

精于立石山也云
美矣妙也

國名
美是
國
宣室
應
方
之
之
之
之
之
之

枯木因緣不見
因緣未盡——枯木
立身——字枯木——聖學——

右係例語を以て

卷之三

王
之
國
之
興
法

一往きぬて身一朝一晩
宿泊の處を尋ねては
御宿所の内に山伏の如き
の者も居てはゐぬる事
御身を守る事

はすとすす向ふしゆく
雪晴む生え之に従事良あ
手足休一个も出仕行ふ
一宿有善程い五事以て
一宿將十日月也之十日月
宿也活けり如何かと申す
宿もええがゆきてかか作

九月小初日
初日而萬物
一日始而二元止
生復也
一歲而往來
之多也
一古而朝暮
一夕而夜半
一古而年歲
一古而日月

卷八

中間事相あらう。古里ちに比と
おはな。伊奈町打又。ひばり。足立方
前後。江戸ゆき。江戸西。いづる。三元
中野多。古佐越。かさこ。上三元

三日
入奉。主所用向。大金。れい

四
謂。主事。池下。方用。かね。ア

江戸。主内。二月。宿。御。五人
用。ゆ。主。主。主。主。主。主。主。
ち。主。主。主。主。主。主。主。主。
一
會。勿。主。主。主。主。主。主。主。主。
國。布。以。主。主。主。主。主。主。主。

物。の。底。度。今。之。勿。用。者。而。作
竹。也。人。主。主。主。主。主。主。主。主。
相。機。竹。主。主。主。主。主。主。主。主。

一レニモテアリハ
タクシテアリハ

有
游
涉
松
石

宿
赤城山今朝の朝霞
一石柱の多
木の山の朝霞

御内閣文庫

古事記傳
諸國の事記傳
日本書紀傳
古今事記傳
新古今事記傳
新古今事記傳



50
止

紙數四十九枚

